

結果構文の項構造と その統語的振舞いについて

三 浦 郁 夫

1. 序論

これまで生成文法においてしばしば問題となってきた構文に、(1)、(2)のような結果構文(resultative construction)と呼ばれる構文がある。

- (1) a. The gardener watered the tulips flat.
b. The grocer ground the coffee beans into a fine powder.

(Carrier and Randall 1992 : 173)

- (2) a. The joggers ran their Nikes threadbare.
b. The kids laughed themselves into a frenzy. (ibid.)

(1)は他動詞がもとなっている結果構文(Transitive Resultative Construction、以下TRC)である。一方、(2)では自動詞がもとなっている(Intransitive Resultative Construction、以下IRC)。この構文では、動詞と対格名詞句(accusative NP、以下AccNP)¹の後にAPやPPが後続するが、それらは動詞の示す出来事によるAccNPの結果を叙述している。例えば(1a)では、庭師がチューリップに水をかけた結果、チューリップが倒れたという解釈になる。

結果構文の問題の一つは、その項構造である。特にAccNPが主節の項であるのかどうかという問題は、議論の分かれる問題である。また、TRCとIRCには後に触れる幾つかの統語的違いがあり、その違いも説明されなければならない。

本論文の構成は次のようになる。2節では、結果構文のAccNPと結果述語は小節を成すのではなく、AccNPは主節の動詞の目的語であると主張する。この

主張は TRC においても IRC においても成り立つ。3 節では、TRC と IRC の幾つかの統語的違いについて考察する。それらの違いは、TRC と IRC の主題役割割付との違いから導かれることを主張する。4 節はまとめである。

2. AccNP の位置付け

Kayne (1984)、Hoekstra (1988) などは、結果構文の AccNP を、結果述語を述語とする小節の主語と分析している。この分析によると、結果構文の AccNP は主節の項ではない。それに対して、Carrier and Randall (1992) や Yamada (1987) は、IRC の AccNP は主節の項ではないが、TRC の Acc NP は主節動詞の項であると主張している。² 本節では、TRC においても IRC においても、結果構文の AccNP は主節動詞の項であることを主張する。

2.1 TRC の AccNP

TRC の Acc NP が主節動詞の項であることは、(3) のように TRC から中間動詞 (middle verb) を形成出来ることから示される。

- (3) a. New seedlings water flat (easily).
b. Those cookies break into pieces (easily).

(Carrier and Randall 1992 : 191)

Tenny (1989) によると、中間動詞の主語となる名詞句は、動詞によって表わされる出来事 (event) の継続時間を定めていなければならない。例えば (4) の対比は、この一般化によって説明される。

- (4) a. The desert crosses easily for settlers with large wagons.
b. *The desert wanders easily for settlers with large wagons.

(Tenny 1989 : 16)

(4 a) で中間動詞形成が可能であるのは、主語が cross という動作の継続時間の範囲を定めているからである。つまり、砂漠の広さの範囲でしか cross という出来事は継続しない。一方、(4 b) が中間動詞として非文法的であるのは、wander が表わす動作は、砂漠によってその継続時間の範囲を定めることができないから

である。つまり、我々は永遠に砂漠をさまよっていることが可能である。

出来事の継続時間は、名詞句が持つある特性を物差しとして決定される。例えば(4 a)の場合は、砂漠の「広さ」という物差しによって cross という出来事の継続時間が決まってくる。(4 a)の場合、cross という出来事によって砂漠の渡るべき広さが尽きてしまうまでが、cross という出来事の継続時間となる。この場合、cross と the desert の間には密接な関係があり、動作とその動作を受ける対象という主題関係が成り立っているように思われる。中間動詞の主語が常に出来事の継続時間の範囲を決めるものであるならば、その出来事と中間動詞の主語の間には、動作とその動作を受ける対象としての関係が成り立つことになる。したがって、(4)のように TRC の AccNP が中間動詞の主語になるということは、その動詞と AccNP の間に動作と動作の対象という主題役割付与の関係があることを意味する。それ故 TRC の AccNP は、小節の主語ではなく、主節から主題役割を受け取っており、主節の項であると考えられる。

2.2 IRC の AccNP

前節では、TRC では中間動詞形成が容易であることから、AccNP が主節の項であることを主張した。しかし、Carrier and Randall (1992) は、IRC の中間動詞は一般的に非文法的であると指摘している。

- (5) a. *Competition Nikes run threadbare (easily).
 b. *Phys Ed majors talk into a stupor (easily).

(Carrier and Randall 1992 : 191)

Carrier and Randall は、この事実から IRC の AccNP は主節の項ではないと主張している。

しかしながら、IRC からの中間動詞形成が非文であることは、中間動詞の意味から説明することができる。Fellbaum (1985)、Goldberg (1991) は、中間動詞構文の表わす出来事は、行為者の意図的な出来事でなければならないと主張している。しかしながら、Carrier and Randall 自身が指摘しているように、ほとんどの IRC では、結果述語が表わす結果は意図された結果ではないように思われる。例えば、(2 a)は、the joggers が意図的に自分のナイキの靴をすり減

らしたのではなく、走った結果、擦り切れてしまったと言う解釈になる。つまり、靴をすり減らすという出来事においては、the joggers は意図的ではない。(2b)においても同じことが言える。IRC が表わす出来事が意図的でないという事実は、中間動詞の意味と矛盾する。つまり IRC から中間動詞形成が一般的に出来ないという事実は、AccNP が主節の項ではないという理由からではなく、IRC の意味が中間動詞の意味と矛盾するという理由から説明することが可能である。

この分析が正しいのならば、IRC の結果述語が意図された結果を表わす場合、IRC から中間動詞を形成することが可能になると予測される。この予測は、Goldberg (1991) によると正しい予測であり、(7)のような文脈が与えられれば、(6)のように IRC からの中間動詞構文が可能になる。

(6) Go buy some cheap tires for that scene, those inexpensive tires
drive bald really quickly. (Goldberg 1991 : 72)

(7) "people in charge of props on a movie set are asked to drive 50 tires
bald for a stunt." (ibid.)

(7)の文脈の下では、(6)の中間動詞構文が表わす「車を運転してタイヤをすり減らすこと」が意図的な出来事になる。したがって、(8)の中間動詞構文は IRC から派生されたにもかかわらず文法的になる。

前節で中間動詞の主語は、もとの動詞の項でなければならないことを主張した。したがって、(6)のように限られた環境ながらも IRC からの中間動詞形成が可能であることは、その AccNP が TRC の AccNP 同様、主節の動詞から何らかの主題役割を受けていると考えられる。

しかしながら、IRC のもとになっている動詞は自動詞であるが、自動詞は定義上、目的語を取ることが出来ない。つまり、結果述語が現れないと自動詞は目的語を認可できない。したがって、IRC の AccNP が主節の項であるとする、IRC の AccNP がどのような認可されるのかという問題がでてくる。本論では、IRC においては動詞だけが AccNP を認可するのではなく、動詞と結果述語が複合動詞を形成し、その複合動詞によって AccNP が認可されると仮定する。一方、TRC では、結果述語の生起とは関係なく AccNP が現れる。本論ではこ

の事実から、TRCのAccNPは主節動詞のみによって主題役割を付与されていると仮定する。IRCのAccNPとTRCのAccNPのこの違いは、3節においてTRCとIRCの統語的な振る舞いの違いを説明する際に重要となってくる。

2.3 2節の結論

本節では、結果構文のAccNPが主節の項であることを主張した。TRCに関しては、中間動詞の形成が比較的容易であることから、そのAccNPが主節の項であることが示される。IRCから中間動詞を形成することができないように見えることは、IRCと中間動詞構文の意味が矛盾することから説明される。そして、適切な文脈の下では、IRCから中間動詞を形成することが可能になる。このことは、IRCにおいてもそのAccNPが主節の項であることを示している。

3. TRCとIRCの統語的相違

2節で結果構文のAccNPは、主節の項であると主張した。この主張は、TRCだけではなく、IRCにも当てはまる。しかしながら、TRCとIRCには幾つかの統語的な違いが見られる。TRCとIRCの統語的な違いの一つは、動詞を修飾する副詞の位置の違いである。Yamadaによると、TRCではAccNPと結果述語の間に動詞を修飾する副詞が現れることが可能である。それに対して、IRCのAccNPと結果述語の間には、動詞を修飾する副詞は介在出来ないようである。このことは、(8)と(9)の対比によって示される。

- (8) a. John shaped it quickly into a dog.
 b. I shaped it quickly square. (Yamada 1987 : 79)
- (9) a. *John walked himself quickly tired.
 b. *We laughed John aloud out of the meeting. (ibid.)

本論で論ずるもう一つの違いは、AccNPからの抜き出しである。Levin and Rappaport (1994)によると、(10)が示すように、TRCのAccNPからの抜き出しは可能である。一方、(11)で示されるように、IRCのAccNPからの抜き出しは出来ないようである。

- (10) a. Which tables did you wipe the tops of clean?
 b. Which gang did you shoot the leader of dead?

(Levin and Rappaport 1995 : 69)

- (11) a. *Which man did the dog bark the neighbors of awake?
 b. ? Which shoes did you run the soles of thin? (ibid.)

本節では、このような統語的な違いが何に起因するのかという問題について考察する。

3.1 副詞の位置の違い

統語構造の枠組みとして、本論では Koizumi (1993) の分離 VP 仮説を採用する。この分析によると、他動詞構文の構造は(12)のようになる。(ここでは、本論に関係する部分の構造のみ表記する。

- (12) $[_{VP_1} NP [_{V_1'} V_1 [_{AGRoP} [_{AGRo'} AGRo VP_2]]]]$

この構造では、VP が AGRoP によって、VP₁ と VP₂ の二層に分けられている。VP₁ の指定辞には外項が生成される。そして、目的語などの内項は VP₂ の内部に生成される。この分析では、目的語のような動詞から対格を付与される NP は、基底の位置である VP₂ 内から顕在的に移動する。移動する位置は AGRoP の指定辞位置である。また、動詞は VP₂ 主要部として生成され、AGRo を経由して V₁ に顕在的に移動する。そして、AGRo を経由する際に、指定辞-主要部の関係 (spec-head relation) で [Spec, AGRoP] に位置する NP の対格が照合される。

Koizumi のこの枠組みを仮定すると、TRC の(8b)の S 構造を(13)のように仮定することが出来る。³

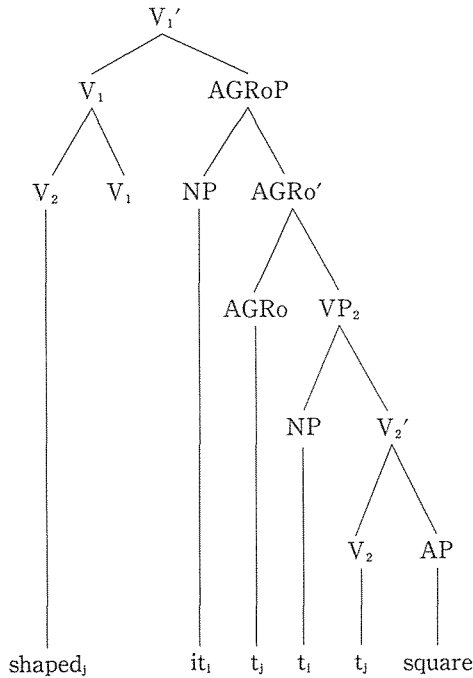
- (13)

この構造では、it が VP₁ 内から [Spec, AGRoP] へ移動している。また、shape は AGRo を経由して V₁ へ移動している。動詞を修飾する副詞が V の投射に付加されると仮定すれば、(13)の構造において副詞が AccNP と結果述語の間に入ることになり、(8b)が文法的になることが正しく予測される。よって、TRC の AccNP と結果述語の間には主節動詞を修飾する副詞が現われることにな

る。

しかしながら、IRC に対して TRC と同じ派生を仮定すると、TRC の場合と同じように AccNP と結果述語の間に動詞を修飾する副詞が介在できると誤って予測されてしまう。前節において、IRC は TRC と異なり、AccNP が動詞と結果述語の複合体によって主題役割を与えられると仮定した。本論ではさらに、複合動詞に主題役割を与えられる要素の格は、その複合動詞全体によって照合されなければならないと仮定する。この仮定が正しいのならば、IRC では動詞だけではなく複合動詞全体が AGR₀ に繰り上がらなければならない。つまり、IRC の (9a) における AccNP の格の照合は、(14) のような構造によって行われる。

(13)

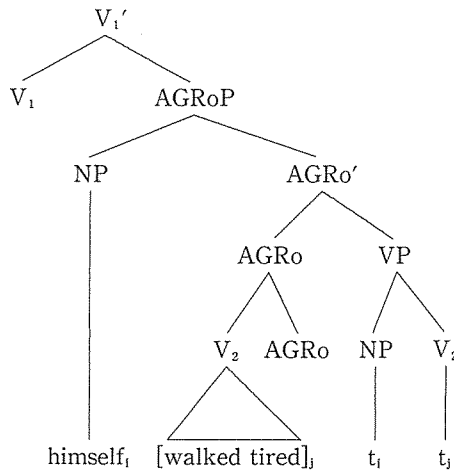


(14)

この構造では、動詞と結果述語が一まとまりで $AGRo$ に移動している。この構造において、主節を修飾する副詞が *himself* と *tired* の間に入るためには、 AGR' か $AGRoP$ に付加されなければならない。ここで、Koizumi (1993) の仮定にしたがって、副詞はその意味と一致する範疇にのみ付加されうると仮定する。 $AGRo$ は一致を担う範疇であり、それ自体に意味は持たないように思われる。したがって、 $AGRo$ の投射は、副詞の意味と一致するような意味を持つことはないため、 $AGRo$ の投射には副詞は付加されないことになる。この仮定は、(9 a) の非文法性を説明する。(9 b) でも同じことが当てはまる。

IRC に対するこの分析の問題点は、対格 NP と結果述語の語順である。(14) の構造から、複合動詞全体が繰り上がると、予測される語順は動詞—結果述語— $AccNP$ という語順になる。しかしながら、結果構文の語順は一般的に動詞— $AccNP$ —結果述語という語順である。したがって、動詞だけが上位の V まで繰り上がると仮定しなければならない。本論では、このことは、文の焦点 (focus) と関係していると考えられる。つまり、英語においては、情報的に重要な要素は文末に現われる傾向があるが、結果述語が $AccNP$ よりも情報的に重要であるため文末に現われると仮定する。

(14)



3.2 AccNP からの抜き出しの可能性の違い

本論が採用している統語構造の枠組みでは、目的語は顕在的に NP 移動される。したがって、目的語からの wh 移動を問題にする場合、NP 移動と wh 移動のどちらが先に適用されるかという問題を考察しなければならない。次の対比は、wh 移動は NP 移動の後に適用されることを示す。

- (15) a. Who did you say that John stole pictures of ?
 b. ? ?Who did you say that pictures of were stolen ?

(Collins 1994 : 48)

(15)の両文において、もともと who が存在していた pictures of who は、D 構造では同じ位置を占める。というのは、この句はどちらも steal の内項だからである。したがって、もし pictures of who が NP 移動される前に who が抜き出されると仮定すると、(15)の両文は同じ文法性が予測されることになる。一方、pictures of who が NP 移動された後に who が移動されれば、(15 a)と(15 b)では異なった位置から wh 移動が行われることになり、これらの文で異なった文法性が予測されることになる。したがって、本論では wh 移動は NP 移動のあとに適用されると仮定する。⁴

この仮定によると、(10 a)、(11 a)の wh 句の移動は、AccNP が[Spec, AGROp]に移動した(16)、(17)の構造から行われることになる。

- (16) [_{VP1} wipe_i [_{AGROP} [the tops of who]_j [_{AGRO'} AGRO [_{VP2} t_j [_{V2'} t_i clean]]]]]]

- (17) [_{VP1} bark_i [_{AGROP} [the neighbors of who]_j [_{AGRO'} AGRO [_{VP2} t_j [_{V2'} t_i awake]]]]]]

問題は、これらの構造における AccNP が移動の障壁 (barrier) となっているかどうかである。本論では Chomsky (1986) に従って、L 標示 (L-marking) されていない範疇は障壁になると仮定する。すなわち、障壁は次のように定義される。

- (18) γ is a barrier for β iff (a) or (b) :
 a. γ immediately dominates δ , δ a BC for β ;
 b. γ is a BC for β , $\gamma \neq \text{IP}$. (Chomsky 1986 : 14)

(19) γ is a BC for β iff γ is not L-marked and γ dominates β . (ibid.)
 本論ではまた、L 標示の条件として(20)のように仮定する。(20)の定義における「選択 (select)」という概念は、次のように考える。ある要素 a が b に主題役割を与える場合、 a は b を選択する。また、主要部はその補部を選択する。したがって、動詞によって主題役割を与えられ、またその動詞に統率される要素は、その動詞に L 標示される。統率の定義としては、Stowell (1991) に従い、(21)のように定義する。

(20) α L-marks β iff

- (i) α is the category selecting β in D-structure, and
- (ii) α governs β .

(21) a. α governs β if and only if

- i. α c-commands β , and
- ii. for all δ , δ a barrier for β , if δ dominates β , then δ dominates α .

b. α c-commands β if and only if every category dominating α also dominates β . (Stowell 1991 : 192)

これらの仮定によると、TRC の AccNP は L 表示される。(16)の V_1 にある wipe は the tops of who を c 統御しており、また障壁がその間に介在しない。というのは、AGRoP は V_1 の補部であるからである。したがって、wipe は AccNP を統率する。また、wipe は AccNP に主題役割を与えているので、L 標示もしていることになる。したがって、(16)の AccNP は障壁にはならず、wh 句の抜き出しが可能であることが予測される。

一方、(17)の AccNP は L 表示されない。bark は AccNP を統率しているが、AccNP は bark に選択されているとはいえない。というのは、AccNP を要求するのは、動詞だけではなく、動詞と結果述語の複合体 bark awake だからである。したがって、AccNP は L 標示されず、移動の障壁となる。このことは、(10 a)の AccNP から who が抜き出されないことを説明する。したがって、IRC からの wh 句の抜き出しは非文となると正しく予測される。

3.3 3節の結論

3節では、TRCとIRCにおいて主題役付与の方法が異なっていると仮定することによって、(8)(9)および(10)(11)の対比が説明されることを主張した。TRCでは動詞だけでAccNPに主題役付与が行われるのに対し、IRCでは動詞と結果述語の複合体によってAccNPの主題役付与が行われる。

4. 結語

本論では、結果構文の項構造及び、TRCとIRCの統語的振る舞いについて論じた。2節で項構造に関して論じ、結果構文のAccNPが主節の項であると主張した。このことは、AccNPが中間動詞の主語になりうることから導かれる。3節では、TRCとIRCの統語的振る舞いの違いについて扱った。この違いは、TRCとIRCにおいて主題役付与の方法が異なっていると仮定することによって説明された。

Notes

- 1 (1)、(2)で動詞に後続するNPが動詞から対格を受けていることは、受動化によってそのNPが主語となることから示される。
 - (i) The seedlings were watered flat. (Carrier and Randall 1992 : 196)
 - (ii) Her Nikes have been run threadbare. (ibid.)
2. Yamada (1987) は、IRCに対して小節構造を仮定している。一方 Carrier and Randall (1992) は、IRCのAccNPを動詞の目的語の位置に生成されるが、動詞から主題役割を受けていないと分析している。
3. (13)の構造では、AccNPの基底の位置をVP₂の指定辞の位置に、結果述語の基底の位置を補部の位置に仮定している。しかしながら、この仮定は便宜的な仮定であり、実際にAccNPと結果述語がD構造でどの位置を占めるのかという問題は、さらなる考察が必要だろう。しかしながら、AccNPと結果述語のD構造の位置は後の議論に影響を及ぼさないため、本論では便宜的に(13)の構造を仮定する。

4. この結論は、Chomsky (1973) の厳密循環条件 (Strict Cycle Condition) によって導かれる。

参考文献

- Carrier, J. and Randall, J. (1992) "The Argument structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Chomsky, N. (1973) "Conditions on Transformations," ed. by S. Anderson and P. Kiparsky, *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart, and Winston, New York.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Collins, C. (1994) "Economy of Derivation and the Generalized Proper Binding Condition," *Linguistic Inquiry* 25, 45-61.
- Fellbaum, C. (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity*, CLS 21, Part 2, 21-31.
- Goldberg, A. E. (1991) "A Semantic Account of Resultatives," *Linguistic Analysis* 21, 66-96.
- Hoekstra, T. (1988) "Small Clause Results," *Lingua* 74, 101-139.
- Kayne, R. (1984) "Principles of Particle Constructions," ed. by J. Gueron *et al.*, *Grammatical Representation*, 101-140, Foris Publications, Dordrecht.
- Koizumi, M. (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 99-148.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Stowell, T. (1991) "Small Clauses Restructuring," *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. by R. Freidin, MIT Press, Cambridge, MA.
- Tenny, C. (1989) "The Aspectual Interface Hypothesis," *Lexicon Project Working Papers* 31.
- Yamada, Y. (1987) "Two Types of Resultative Construction," *English Linguistics* 4, 73-90.

Synopsis

The Argument Structure of Resultative Constructions and
Some Problems with Their Syntactic Behavior

By Ikuo Miura

One aim of this paper is to investigate the argument structure of resultative constructions such as *The gardener watered the tulips flat*. Some linguists like Kayne (1984) and Hoekstra (1988) argue that the accusative Case-marked NPs of resultative constructions (henceforth, AccNPs) are the subjects of the small clauses which are headed by the resultative predicates. In this paper, I argue that this assumption is not valid, and that AccNPs are the arguments of the main verbs. As for transitive resultative constructions (henceforth, TRCs), this conclusion is supported by the fact that the middle formation from TRCs is possible. According to Carrier and Randall (1992), however, the middle formation from intransitive resultative constructions (henceforth, IRCs) is impossible. Carrier and Randall argue from this observation that the AccNPs of IRCs are not the arguments of the matrix clauses. But the impossibility of the middle formation from IRCs is explained by the fact that the meaning of middle constructions often contradicts that of IRCs. And under the appropriate contexts, middle verbs are formed from IRCs. This fact seems to indicate that the AccNPs of IRCs are also the arguments of the matrix clauses, as well as those of TRCs.

In this paper, I also investigate two syntactic differences between TRCs and IRCs. One difference is the position of adverbs modifying the matrix verbs : while the adverbs modifying the matrix verbs in TRCs can intervene between the AccNPs and the resultative predicates, those in IRCs cannot. The other difference discussed in this paper is the extractability from AccNPs : the extraction from the AccNPs of TRCs is possible, but that from the AccNPs of IRCs is not. I argue that these differences between TRCs and IRCs are reduced to the assumption that the element assigning the thematic roles to AccNPs is

different in TRCs and IRCs: the AccNPs of TRCs are theta-marked only by the matrix verbs, but those of IRCs are theta-marked by the complex of the matrix verbs and the resultative predicates. This assumption is needed in explaining the licensing of the AccNPs of IRCs.